



ことばの紙つぶて

堀 達也

ある日のこと。何をするでもなく、紫煙をくゆらせながら、ぼんやりと眺めていた書棚の片隅に、やや黄ばんだ一冊の本を見つけました。本というには、おこがましい、小冊子のようなものですが、妙に懐かしくなつて、ぱらぱらとページをめくり始めました。

「ことばの紙つぶて」というタイトルの脇に「知事メッセージ集Ⅰ」とあり、著者は私になっています。あとがきを見ると、北海道の職員向け情報誌「Be北海道」に毎月掲載された知事メッセージの中から十九本を選び、まとめたものとなっています。

最初の文章は、平成九（一九九七）年五月の創刊号に掲載された「今、変

えなければ北海道は大きく遅れをとる」と題したインタビューです。

「道職員として仕事をする上で、知事はどつちを向いて仕事をしているか、考えてほしいとおっしゃっています」

知事 国の省庁があり、市町村があり、その中間に道庁があります。いままでの道庁を見ていると、本庁が霞が関の役割をしているんですね。現場は地元の要望を聞いて計画を上げてきます。それが霞が関でつくった基準に合わないものだから、本庁が霞が関に代わって、『こんな計画を持つてきてダメ』と指導するわけです。それは本末転倒で、むしろ地方の現場から上がつ

てきた計画を霞が関に持ち込んで、うまく予算化するために説明するのが本庁なり道の役割なんです」

平成十年の年頭挨拶を収めたVOL.6の「地域政府の視点から北海道の構造改革に取り組もう」には、こんなくだりがあります。

「皆さんは普段使っている道庁の封筒に『ホッカイドウ・ガバメント』と英文で記されていることを意識されておりましょうか。私は、これからの北海道は、一つの『地域主権』、あるいは『地域政府』という考え方で、根源的、基本的なところから、構造改革を行わなければならないと考えています。北海道は自己決定・自己責任という原則のもとに、精神的にも、経済的にも、文化的にも独立性を持った、『地域主権』・『地域政府』へ生まれ変わることで、さらなる発展の可能性が開けると考えております」

いま、民主党政府が掲げる「地域主権」という言葉を、北海道では十二年前から使っていたことになりました。

VOL.8「北海道にこだわることから始めよう」（平成十年三月）では、北海道の自主・自律に向けた、具体的



な取り組みについて書いています。

「北海道で年間に消費される米は約二十三万トン。そのうち北海道の米がどのくらい食べられているかというところ、平成八年度で約八万三千トンですから、四割を切っています。米の大生産地なのに、道産米がそれしか食べられていないのです。あくまで試算ですが、道産米の消費率を現状の四割から七割に上げると、販売額は約二百億円も増えます。自主・自律に向けた道民運動として、農産物に限らず道産品の愛用運動を展開していきたい」

当時、三十七%と過去最低に落ち込んだ道内食率は、最近では八割に迫るところまで伸びてきました。うれしい限りです。

VOL. 13 「北海道独自のスタンダー

ドを創ろう」（平成十年七月）では、今で言う「二地域居住」について触れています。

「地方が過疎だ、過疎だといっているだけでは始まりません。豊かき物差しを変えて、過疎という価値に目を向けると、そこにはゆとりをもって人間らしく生活できる『豊かさのもと』が豊富にあります。そうした価値に着目すれば、旅行でも移住でもない『半定住的』な発想もできます。例えば、『さわやかな北海道の夏や秋。一定期間道民として住んでもらう。いわばシーズン・ハビタントです」

VOL. 21 「不易を知らざれば基たちがたく、流行を弁えざれば風あらたならず」（平成十一年三月）では、時のアセスメントに込めた思いを話しています。

「朝日新聞の船橋洋一さん（現在同紙主筆）が取材にみえた折、ひとしきり時のアセスが話題となりました。船橋さんは『時のアセスは、時間という概念に判断させるといふことですね。しかし、本来なら選挙で選ばれた知事がリーダーシップで決めていくべきです』という趣旨の質問を何度かされま

した。政治の決断で、幾つかは見直すことができるでしょうが、結果的に対立や反目に拍車をかけることになったり、知事が代われれば『ハイ、それまで』ということにもなりかねません。私は、行政が自ら進めてきた事業を自分の手で『腑分け』するというプロセスを通じて、自己決定・自己責任の痛みや重みを感じることが次の施策を進めていく上で何より尊い財産になると考え、時のアセスの仕組みを行政内部のシステムとして整備し、定着させたいと思いました」

言葉で何かを変えていく、動かしにくいということは容易なことではありませんが、今、読み返してみると、言葉の端々に、その時々私の個人的な思いや感情がにじみ出ており、気恥ずかしくもあり、懐かしくもあります。

懐古趣味とは無縁の人間と思ってきましたが、自分は何をしてきたのだろうか、ふともの思いにふける瞬間があります。これも歳のせいでしょうか。今年で七十五歳、後期高齢者の仲間入りです。

△ほり たつや・前北海道知事▽